

主要浮魚類の資源評価と漁況予測に関する研究

(資源評価調査・日本周辺高度回遊性魚類資源調査)

佐々木正・曾田一志

1. 研究目的

本県の主要な漁獲対象種の内、浮魚類11魚種の資源状況を漁獲統計調査、市場調査、試験船調査により把握し、科学的評価を行なうとともに、資源の適切な保全と合理的かつ永続的利用を図るための提言を行うとともに、本県の主要浮魚類の漁況予測を行う。なお、本調査から得られた主要浮魚類の漁獲動向については、平成19年度の漁況として別章に報告した。

2. 研究方法

主要浮魚類11種（ブリ、マアジ、マサバ、マイワシ、カタクチイワシ、ウルメイワシ、ケンサキイカ、スルメイカ、マグロ類、シイラ、ヒラマサ）について漁獲統計資料の収集、市場における漁獲物の体長組成調査、生物精密測定および試験船による卵稚仔調査を実施した。さらに、これらの調査結果をもとに独立行政法人水産総合研究センターおよび関係各県の水産研究機関と協力して、魚種別の資源評価を行い生物学的許容漁獲量（ABC）の推定を行った。

3. 研究結果

(1) 漁場別漁獲状況調査

中型まき網漁業について、13ヶ統の漁獲成績報告書の収集、整理を行い、フレスコシステムによりデータ登録を行った。また、漁業協同組合JFしまね浜田支所と大社支所に所属する定置網漁業者各1ヶ統を標本船として日単位の操業記録を整理した。

(2) 生物情報収集調査

主要浮魚類11種について漁獲統計資料の整備を行った。また、8魚種（ブリ、マアジ、マサバ、マイワシ、カタクチイワシ、ウルメイワシ、スルメイカ、マグロ類、）を対象に、市場に水揚された漁獲物の体長組成ならびに生物測

定（体長、体重、生殖腺重量、胃内容物等）を計77回実施した。さらに、独立行政法人日本海区・西海区水産研究所が中心となつて行う資源評価会議に参加し、資源量、漁獲水準、漁獲強度の推定と、管理方策の提言を行った。さらに、トビウオ通信平成19年度1号、3号、6号、7号、8号において8魚種について、資源動向や各魚種を対象とする漁業の動向に関して報告を行った。

(3) 卵・稚仔分布調査

いわし類、スルメイカ、マアジ、マサバを対象として、各魚種の加入量水準を推定する資料とするため、試験船「島根丸」により改良型ノルパックネット（Nytal 52GG ; 0.335mm）を使用して卵・稚仔分布調査を行った。調査は、平成19年4月、6月、10月、11月、平成20年3月に計77点で実施した。調査結果は独立行政法人水産総合研究センターに報告し、対象魚種の資源評価に利用された。

4. 研究成果

研究結果から推定されたABCをもとに、マアジ、マイワシ、マサバ、スルメイカのTAC（漁獲可能量）が設定された。